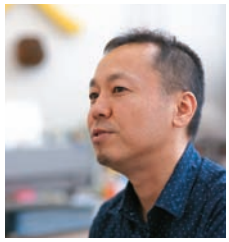


マスター to アーティスト

【第8回】

＜自由と不自由＞

須田真弘 美術学部 美術学科 洋画2コース准教授

1665年　三重県生まれ
1989年　愛知県立芸術大学卒業
1991年　愛知県立芸術大学大学院修了
2008年　TrAIN Research Centre, University of the Arts Londonで一年間研修

1992年　「イメージの新様態」ギャラリーすずき（京都）
1995年　「existence」ギャラリーセラー（名古屋）
「Yellow Room」クリテリオム19（水戸芸術館現代美術センター）
1996年　「topica」Japanese Contemporary Artist greet 1100years of Hungary（ハンガリー）
1997年　「眼差しのゆくえ－現代美術のポジション」（名古屋市美術館）
1998年　「TOKYO ROOMS」Gallery Article（ケルン）
1999年　「Aufenthalt」Murata & friends（ベルリン）
2001年　「Colorscape」アートスペースdot（名古屋）
2002年　「Japan at this Moment」Gallery Vartai,Vilnius（リトアニア）
「Pro Tubo」Theodor Zink Museum, Kaiserslautern（ドイツ）
2003年　「Da Sein」Ernst Barlach Museum,Wedel（ドイツ）
2004年　「UNUSUAL COMBINATION」+Gallery（名古屋）
2006年　「Form and Drawing」北京中央美術学院（中国）
2009年　「NO-ISM」Bodhi Gallery（ロンドン）
「presence & absence」Pridi Banomyong Institute（バンコク）

きれいに片付いたアトリエ。壁には、鮮烈な原色で描かれた洗練された作品が並ぶ。そして、その中に混ざって、アフリカか東南アジアのようなプリミティブな土着的なマスクが飾られている。一見、不釣り合いに見える2つが、奇妙に調和し、居心地のよい空間を作り出している。

アトリエが片づいていることには理由があって、バンコクでの展覧会に出品し、ラオスを小旅行して帰国したばかりでアトリエをしばらく空けていたとのこと。これまでの活動を見てもわかるとおり、数多く海外で個展、展覧会を開催。また、いくつかの海外の学校でも講義を務めたコスモポリタンである。

「いままで20カ国くらいは行ったと思います。個人的には、まだまだもっと行きたいところがあって…」。

大学院を出たばかりの頃、初めて訪れたロンドンで衝撃を受けた。現代美術の若いアーティストたち、自分と同世代のアーティストたちが、活躍をして脚光を浴びていた。当時の日本の状況とは大きな隔たりを感じた。ロンドン、NY…、芸術に対する裾野の広がり、層の厚さ、マーケット、何もかもレベルが違った。「もっと視野を広げないと…」。もっと世界が見たい、それ以来、時間を作って旅に出るようになった。始めはアメリカ、ヨーロッパを中心に、美術館やギャラリーを徹底的に見て回った。教科書でしか知らなかった本物がそこにはあった。そして、ダイナミックなアートを巡る環境に触れ、アートに対する考え方を深めていった。

絵画、オブジェ、展示スペースさえも黄色。黄色を使った作品を作り続けた。そして、それらは高く評価されて行った。こうした活動が、10年近く続く。

「黄色の作品を作っていた頃は、結構、頭でシステムを考えていましたね。初めて、ロンドン、NYを見て、作品に込めた考え、美術のセオリーとでもいうのか、それがすごく大事だと思いました。それで、自分でルールを決めながら、1色だけで、内容も全部決めて、制作にかかってましたね。そ

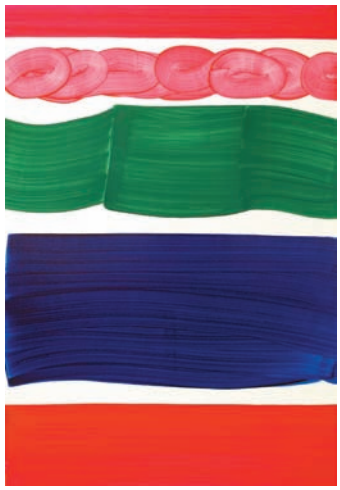
『mountain』
55×45 cm　oil on canvas　2009年

絵の具って混ぜると、彩度が落ちるんですよね。単色。
それが一番強い。きれいですね。

『waves』
各 41×32 cm　oil on canvas　2009年

『head』
65×55 cm　oil on canvas　2009年

『dark face』
30×21cm　oil on paper　2009年



『untitled』
162×112 cm　oil on canvas　2009年

紙に描くのは、毎日、何十枚も描いてましたね。
時間のある時は、今でも描いていますよ。

昨年度ロンドン滞在中でのスタジオ。

うすると作品のイメージが固定化されてきて、自分でもシステマチックに作品が作りやすくなっていくんです。こうして何十年もやっていけば、アーティストとしていいんじゃないか、と思いました」けれども、少しずつ考えには変化がでてきた。もっといろんな可能性があるんじゃないか、閉塞感が自分のやってきたことを疑わせた。こんなとき出会ったのが、タイの古陶磁だった。偶然、展覧会に誘われて訪れたタイ。田舎の古い窯跡で陶片を拾って歩いた。「宋胡録」（「スンコロク」サワンカロークの音訳）として桃山や江戸時代の茶人にも珍重された古陶磁の形状や絵付けの伸びやかさに魅せられた。「最初は全然興味がなかったんですけど、ヨーロッパにはないじゃないですか。こういうのを見たときの面白さに、自分も、もうちょっと伸びやかにやっていってもいいんじゃないかなと」

学生たちには、自由であること不自由さのあること、この２つのバランス感覚が大切だと教える。「美術は本来自由なものなのに、絵を学び始めて上達してくると、だんだんとある意味、不自由になってくるんですよ…。中学生とか高校生くらいになると知識やテクニックも少しずつ向上する反面、自由に描けなくなる。小学校低学年までの頃は、絵を描かせるとものすごく速いし、無心でどんどん描ける。それが、いろんなものを学んでいくうちに、その自由さが失われ、ある意味不自由になっていくんですね。そうして、絵が痩せていく。面白くなくなっていくことがあるんですよ。自由と不自由さを、いかに自分自身の中でバランスを取って作品に出していけるか。それができる人はアーティストとして魅力のある作品を制作できるでしょう。半分子供のような感覚を持っていながら、でも、片方で鋭い美意識を備えていて大人の意見が言える。そういう人ですよ」　黄色い作品を作っていた頃は、少し不自由になりかけていたのかもしれないと振り返る。「科学は人々に安心を与えるが、芸術は動揺を与える」　20世紀初頭のフランスの画家、ジョルジュ・ブラックの言葉が好きだと話してくれた。自由であることの意味…。

「いつになったらいい作品が作れるだろう、って思ってるんですよ」　貪欲な姿勢と創作意欲は、変わることはなさそうだ。西洋と東洋、現代と過去、自由と不自由、主観と客観…。アトリエの作品は、それぞれに作家の心のせめぎ合いを語っていた。